

# 赤い森の お茶の王様



第三回弾・八平さんの“上久世懐古”編

南側、七二号線に架かる久世橋。

南側、久世橋は、

橋脚がさりするほど

の深溝がつづく。

種雑然とした、

独特の賑わいをみせるこの辺りだが

かつては田園地帯であり

広大な茶畑のそばには

蔵王の森と呼ばれる、

深い緑の森があったという。



井上六平

株式会社・井六園社長。昭和九年生まれ。同志社大学を卒業と同時に井六園に入社。昭和五十一年より七代目社長となる。京都市公設市場連合会副理事長や京都YMCA理事など多くの団体役員を歴任。各界の著名人を招いて行う「伊賀茶屋」や「櫻フォーラム」など文化活動にも余念がない。昨年は京都から東京までの「お茶道道中」を復活させた。一期一会が信条の六十才。

取材・文 三村 溪  
写真 大田 メグミ

# すまばり町 赤い標



1



2



3



4

1. 会社の玄関で。隣にたつのは井上氏のご子息。  
2. 光福寺の前で。  
3. 境内の奥にあるお堂。大正時代頃の写真などが飾ってあった。

4. お堂の柱上にあった象の飾り。インドの寺社にあるものにそっくりである。

5. 自宅付近の小川の跡。昔はここで小魚をすくったり、泳いだりもしたそうだ。

6. 境内の楠。昔とまったく変わらない姿で残っている。



5



6

木漏れ陽の山を歩き  
過ぎ去つた時をしばし語る。  
そして沈黙  
見あげれば、みどりのさざめき  
遠く、近く、聞こえる葉ずれの音。  
五十年前と同じ光景を  
今、  
五十年後にふたたび眺める。

# 本格 ちゃんこ鍋

1人前 ¥1,800

大小宴会会 (4名~40名様) 受けたまわります。  
1~3大広間、個室各種御用意いたしております。



## 一品

お造り合わせ	¥1,200
よこわ油	¥1,200
鴨ロース	¥ 800
肉たたき	¥ 900
鯖ぶつ	¥ 800
鯖削	¥ 800
鳥貝	¥ 800
なまこ	¥ 800
豚角煮	¥ 800
鶏唐揚げ	¥ 800
etc	



## ちゃんこ食べ放題

¥2480

## ちゃんこ+飲み放題

¥3980

## ちゃんこ食べ放題

## +飲み放題

¥4980

当館4F  
カラオケルーム新設  
(10名様~30名様) も御利用ください

3月より  
豚しゃぶ ¥1800  
牛しゃぶ ¥3800 始めます

- ご予算、時間メニューなどご相談ください
- 満室・満席の場合が多く、ご迷惑をおかけしております
- ご来店の際はできるだけ、ご予約ください
- 深夜のパーティ
- お昼の宴会特別サービス中
- 24時間OK

京都市北区北山通堀川西入ル北側

ちゃんこ料理

## 北山 両国



075-495-0120

年中無休

0121

井上氏の自毛麻先にて。



狭戸園中神社にて。ここに、八坂神社のご神体がある。



「ここですか？」  
「そうです。まず、ここに案内したかった。この場所はわたしにとって特別な意味をもつのですよ」  
久世橋通りの南西、とある二車線道路の裏手。その小さな寺は「しんまり」として新興住宅地の一角に、ひっそりたたずんでいた。  
桜の古木が並ぶ小道。奥に、木漏れ陽の散る境内が見える。名は光福寺。村上天皇ゆかりの寺だという。かの天皇が治世したのは十世紀。幾度も修復を受けてはいるだろうが、すでに千年近く前に建て



真先に置かれた茶室。江戸時代まで、実際に使われていたものを迎さまにして飾っている。

立されていることになる。京都には古い歴史をもつ寺社仏閣がたくさんある。この寺などは新しい部類に入るのかも知れない。  
しかし、真新しい住宅やアパートの片隅に幾世紀もの時を超えつづけた建物がぼつねんと存在することに、ある不思議な感情を呼びさまされていた。  
「ここにはね、むかし、蔵王の森と呼ばれた森があったのです。わたしが子どもの頃にも、まだ、鬱蒼と茂る木々や竹林が残っていた。京都には七つの森がありましてね。札の森や藤の森など、みんな

そうです。今はもう、その名残さえとどめてはいませんが」  
茶匠・株式会社井六園代表である、井上六平氏はまるで旧友をなつかしむように述べた。創業文政元年の井六園は、氏で七代目を数える。  
「私どもは、ずっと昔からこの上久世に居りましてね。お寺の過去帳から二百五十年前までの歴史がわかっていました。この辺りの一帯は広大な茶畑がひろがっていたのですよ。西ヶ丘茶園という高名な茶園もありました。桂川の豊富な水と、肥沃な土壌は茶づくりに適していたのでしよう。それで、わたしの家もすいぶんむかしから、茶づくりを生業としてきたのです。  
過去帳より以前のことはすつとわからなかったのですが、京都大学の先生方がわたしの家の蔵を調査されましたね。で、ある古文書がみつかったのです。それは、東寺に所蔵される古文書(百合文書)と一致する内容のものでして、山城国一揆(十五世紀・室町時代に現在の京都南部

で発生した歴史上有名な一揆、二十六人衆と呼ばれる有力土豪が高山氏を放逐、約8年間自治的体制をつづけた)に関するものでした。その中に、わたしの祖先の名が出てきたのですよ。  
ですから、少なくとも五百年前からこの地に住んでいたことがわかりました。自宅は、このお寺のすぐそばにあります。わたしも、わたしの父も、祖父も曾祖父も、ここで遊んで育ちました。いえ、ひよつと住っていたのかも知れませんが。  
すいぶん長い前置きで、と苦笑しながら氏は自分と寺とのつながりをそんなふう

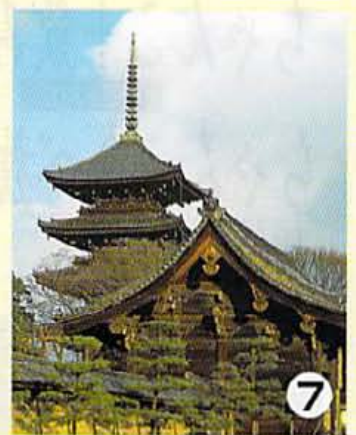


真先にしつらえた茶室の前にて。

# 赤いますば 矢のつば 標り町



1. 綾戸國中神社の境内。
2. 境内にあった手水。
3. 綾戸國中神社の筆頭総代であった五代目・井上六平氏の名を印す石柱。
4. 祖父の思い出を語る井上氏。
5. 境内のお堂付近。
6. 東寺遠景。
7. 井上家の歴史が、この東寺の古文書によっても明らかにされた。



に置いた。  
現在、この辺りは「一七」号線と久世橋を中心朝の渋滞がすさまじい。大きなビルやレストラン、ファーストフードの店舗もつきつぎと並び、雑然とした一種独特の賑わいをみせている。だが氏のお話によれば「わたしが子どもの頃は、このあたりはすべて田畑でした。北へ目をむければ五山の送り人が一望できました。西をみれば物集女街道から遠く西山のあたりまで、ほんとうになにもありませんでしたよ」

たという。  
境内をゆっくりと歩きながらひとしきり過去を回想したあと、ふと、氏は空を見上げて沈黙した。両側にそれぞれ札立する桶の古木が、節くれた枝をひろげている。濃いみどりのさざめきが、遠く聞こえる葉ずれの音とともに樹の高さと大きさを、あらためて教えていた。  
「いやあ、今日、取材していただいたおかげで、いいものを見せていただきました。実は、三〇年ばかりも、狂間境内を訪れたことがなかったのです。それで……」

ああ、子どもの頃にみたこの桶ですが、今もあの頃と同じです。何もかわっていません。あおくて、みどり色の葉も、風の音も、あの高さも。  
ちょっと言葉にできないのですが、とにかく、よいものを見せてもらいました……」  
光福寺から車で五分ほどのところに綾戸國中神社という神社がある。井上氏にとっては、ここもたいせつな場所だ。  
「八坂神社の二神体は、ここにあるのですよ。祇園祭りの際にはお稚児さんがここ



「忙しい今の時代に、いちばん必要なのはゆとりです。そして文化はいつもゆとりから生まれるのです。その中で、お茶は人の心と文化をむすぶ役割を果たしてきたのですよ」

# 京ごころ

風味ゆかしい都の漬物。すぐきは  
伝統と風土が産んだ京の味わい。



独特の酸味としんなりした歯触りがやさしい京漬物の代表格「すぐき」。その高貴な味は、京都でも古い歴史をもつ上賀茂神社の社家(しやけ)により、桃山時代の昔から育まれてきた。社家とは神官の屋敷のこと。明神川に沿う社家町は、現在では伝統的建造物保存地区に指定されている。その一軒に、すぐきの老舗なり田がある。

栽培され始めてからも他の村への持ち出しは禁じられ、すぐきは上賀茂のみを唯一の故郷として根付いた。漬物には殊の外うるさい京都人のことゆえ、すぐきの風味は殿上人をはじめ、文人墨客のあいだで大いにもてはやされ、最古の文獻は江戸初期にまで遡る。信子(のぶこ)子(こ)でもあった黒川道祐(みちすけ)の著した「日次記事」に、初夏の産物として現在の茨祭の頃に人から贈られたという記述が見える。やや下って江戸後期の歌人、加茂守孝(もりたけ)よりすぐきを贈られた蜀山人(しやく山人)は、京師より「特な(すいな)酸味(すいあじ)女(をんな)御茶(ごちや)」を贈られて、東男(とうなん)の妻(さい)「米(こめ)」とこそせめとの返歌(へんか)を送った。盛んに贈答品として

て用いられ、すでに高級嗜好品の座を揺るぎないものとしていた。「特な」すぐきの様子がしのばれる。そんなすぐきに、先頃新たな発見がなされた。京都パストワール研究所によると、「すぐきの乳酸菌からインターフェロン(インターフェロン)の産生能を高め、人の免疫機能を助長する新しいタイプの「ラブレ菌」を発見した」とのこと。インターフェロンといえは、がん治療や感染症の予防・治療に大活躍し、医学界の未来を担う画期的な物質である。すぐきの代名詞ともいえるなり田の家に、代々長寿が続くのも実にうなずける話だ。昨日と明日をつなぐすぐきの里には、ローカルトの故郷アルガリアに、どこか似た味わいがある。



京都市北区上賀茂山本町三十五番地



☎(075) 721-1567  
☎(075) 781-5956  
営業 10:00AM~6:00PM  
水曜休



井六園社内に飾られる先代の遺筆。

「すいすいすいすいすいすいすい、茶壺に追われて……」  
わらべ歌で有名な江戸時代の行事を復活させることで、お茶離れを食い止めることができれば……その思いだけで続けたのだという。  
これまでは京都だけのミニお茶会道中だったが、建部千二百年祭のブレイブールと



昭和三十年代後半より起こった流通革命(スーパーマーケットの登場)は、お茶の卸売り業専門であった井六園にも、長年の顧客を失うという厳しい状況を与えた。さらに近年は消費者のお茶離れも進んだ。小売業への転身を軌道に乗せた氏にとって、「お茶はどこで買っても一緒や」と顧客にいわせないことが、今の課題である。そのためユニークな新製品をつぎつぎと開発するが、中身の確かさはさすがに老舗だ。着眼点の新鮮さに、培った歴史がしっかりと説得力をそえていく。  
氏は京都ロイヤルホテルで茶壺(ちやう)六六という喫茶サロンを出店している。これまで、そこで各界の著名人を招待し、「ごころのフ

から八坂さんへ運んでいくのですが、ご存知でしたか？わたしの祖父は、この神社の筆頭絵代(ひづり)でした。その関係で先代も神社を中心、地域のことでもいろいろと奔走したようです。先代は二年前に他界しましたが、近頃、周囲の方々からそうした苦労話を聞かされてね、よく喧嘩もしましたが、この歳になってしみじみ親父がわかったような気にもなっているんです」

井上氏は、二〇年前からお茶道中の復活に取り組んでいる。祇園祭りの神事(かみい)にやかり、その出発点をこの神社に定めた。すでにマスコミでも数多く紹介されているが、自社宣伝のために行ってきたのではないという。  
「昨年六月には京都―東京までの道中も実現した。当初は冷ややかな声もないではなかったが、『東海道ルネッサンス』に連れ、自治体や財界を動かした成果は少しずつ現れはじめている。」  
業界では異才を発揮することで知られているが、お茶のティーバッグを初めて考えたのも氏である。留学から帰った友人に紅茶のそれを見せられて思いついたというが、その開発には高知の製紙会社に泊まり込むという意気込みだった。パテントの

取得も可能だったが、「それより同業者に教えて、世間のお茶に対する関心を高める方が先だと思いましたが」と言い切った。  
「老舗がなんちゅうことする」と非難もされたが、お茶の本道云々を喧伝する前に、消費者の支持を得たのは承知のとおりだ。  
昭和三十年代後半より起こった流通革命

「忙しい今の時代に、いちばん必要なのは、ゆとりです。文化は、いつもゆとりから生まれてきた。そしてお茶は、いつも人の心と文化をむすぶ役目を果たしてきたのですよ」  
ずっと柔軟だった表情が、ちよつと厳しくなる。茶壺(ちやう)特製の抹茶プリンが運ばれて、今日の取材は終わった。

茶壺(ちやう)特製の抹茶プリンが運ばれて、今日の取材は終わった。